

バザー講演会 2025/10/24 (金)

本校では毎年11月に実施されるクリスマスバスケットバザーを目前に控えたこの時期に、主にチャリティーや福祉、貧困問題に携わる講師をお招きし、講演会を実施します。生徒バザー実行委員会が講演者を選び、依頼まで自分たちで担当します。

今年度の講演は、一般社団法人「つくろい東京ファンド」の代表理事で、本校37期のOBでもある稲葉剛さんをお願いしました。稲葉さんは1994年から東京・新宿を中心に、路上生活者や幅広い生活困窮者の相談・支援を行ってこられました。

講演は急に涼しくなった本校ヨセフホールで行われました。受験に向けて通常授業を受ける高校三年生を除いた5学年の生徒が一堂に会したところで、まずバザー実行委員長から挨拶がありました。バザーまで残り30日であり、準備のラストスパートであること、オリジナルグッズの紹介、今年のテーマ「Reflect」に込めた思いを伝えてくれました。自分達のささやかな行動の積み重ねが反射しあって大きな光となり、社会全体を照らしていけるようになってほしいと願って今年のテーマを決めたとのことでした。

実行委員長の挨拶後、すぐに稲葉さんの講演が始まりました。演題は「貧困の現場から社会を変える」ということで、稲葉さんが路上生活者の支援に関心を寄せるようになった学生時代のことから、現在行っている活動に至るまで、路上生活者を取り巻く問題や社会に対して折々どのようなことを感じ、考え、行動してきたのかを伝えていただきました。

1980年代～1990年代初頭にかけて、日本はバブル経済の真っ只中にあり、日本には貧困は存在しないと考えられていました。しかし、バブル崩壊後、失業者の増加にともない、ダンボールハウスで生活する人が新宿駅西口を中心として現れ始めます。学生時代は海外の貧困問題に関心を寄せていた稲葉さんですが、この頃にダンボールハウスの新聞記事を読んだことをきっかけに、友人達と何かできることはないかと考え、まずは当事者の話を聞いてみることにしました。そこから31年（現在も継続中）におよぶ路上生活者への支援活動が始まりました。実際に現地へ足を運んでみると、そこには食べるものがない人や病気にかかっている医療とつながることができない人、役所の「水際作戦」によって適切な支援とつながることができない人達の姿がありました。何かできることがないかと声をかけ支援をしていくのですが、凍死寸前、餓死寸前の人のために救急車を呼んだものの、翌日には亡くなっていたということも一度や二度ではなかったそうです。「日本は豊かな国のはずなのにどうして……」そんな思いを抱えながら、活動の話を学生時代の友人に語っても、「本当に日本にそんなに貧しい人がいるのか」と現実のこととして信じてもらえない。自分だけが「クレバスをのそき込んでいる」ような気持ちであったと語りました。

時代が進み、日本における絶対的貧困は一時期と比べ減少してきている一方で、現在進行形の問題として、稲葉さんは人間関係の貧困についても言及しました。少子高齢化が進む中で人間関係が希薄化し、誰に助けを求めてよいか分からずにいる人がいます。クリスチャン・ボルタンスキーの「人は二度死ぬ、一つは医学的な死だ。もう一つは忘れ去られることによる記憶の死だ。」という言葉の引用が印象的でした。周囲に認識されないまま困窮している人にどのように支援の手を届かせるかを考えなければならないのです。

現在も夜回りを行ったり、ハウジングファーストの考えのもと住居支援を行ったり、支援活動を行っている稲葉さんですが、「誰一人取り残されない社会」の実現のためにはNPOだけでは限界があるため、支援の空白地帯を埋める市民の力が必要だと語ります。自己責任論の広まる現在で、自分たちがどのような社会で暮らしたいかを考えてみてほしいという言葉で講演は幕を閉じました。

実際に自分が見てきたもの、体験したことを終始落ち着いた様子で語る稲葉さんの講演を、生徒達は真剣に聞いていました。

その後の質疑応答においても活発に意見が出され、講演会終了後にも稲葉さんを囲んで、10名程度の生徒有志が座談会を開きました。OBということもありラ・サール生活で印象に残っていることの話や、あえて人が横になれない形状になっている「意地悪ベンチ」についてどのように感じているかなど、ざっくばらんに話をすることができて、生徒達のリアルな見識が広がったように見えました。高三を除く全校生徒でチャリティーや貧困問題について考えるこの機会は、大変貴重だと感じます。

多くの生徒、教職員が参加する、学園の一大行事クリスマスバスケットバザーですが、実は生徒全員に参

加が義務づけられている訳ではありません。生徒達はボランティアの精神で時間とエネルギーを割いて、運営や出店を行っています。生徒に講演の感想を聞いてみると、今回の講演はその精神を一層強める視座を与えてくれる講演だったようです。

多くの生徒が楽しみにしているクリスマスバスケットバザーまであと少しです。折角の機会ですから、ただ行事を楽しむだけでなく、自分の意志で行事に参加し、自分たちが働き、寄付を届けるその向こう側にいる人々に思いをはせることのできる人に育ててほしいものです。

